2024年1月17日・19日　水曜祈り会・金曜集会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ：「心満たされる礼拝へ」　テキスト：ヨハネ4章1節-26節（参照27～42節）

【理解の手がかりとして】

当時ユダヤ人たちは、サマリア地方とその住人たちを差別し関わりを拒絶していた。その理由は、何百年にもわたるサマリアとユダヤとの対立抗争の歴史が関係していた。紀元前１０世紀にイスラエルが南北に分裂した後、北王国では、南ユダ王国のエルサレムに対抗して、首都をサマリアと定めた。その北王国は異邦人が多く住んでいて、必然的にユダヤ人と異邦人との結婚が増えて行った。民族的純粋性を誇っていたユダヤ人にとって、その北王国の姿は受け入れられないことだった。そのようなことが、ユダヤとサマリアの人々との間に立つ隔ての壁となり互いに対立していたのである。

さて、疲れを覚えられたイエス様が、「ヤコブの井戸」と呼ばれる水汲み場で休んでおられた。そこに一人の女性が水汲みに来る。彼女はだれもが水汲みに来る朝夕の涼しい時間帯を避けて、正午ごろに水汲みに来なければならない女性であった。彼女がどんな境遇で生きていたかということについては１６節以降に記されている。彼女は、何度も夫と離別して、人目を避けながら生きてきた女性であった。

イエス様は彼女にこう言った。「水を飲ませて下さい」と。彼女にとって、そのイエス様の接近と求めは、余りにも予期せぬことであったであろう。彼女は言った。「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」(4:9) と。するとイエス様はお答えになった。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」(4:10) と。

彼女はイエス様に尋ねる。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手

にお入れになるのですか。あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか」(4:11-12) と。彼女はまだ「生きた水」という言葉の真意が理解できていなかった。彼女にとって「水」とは、肉体の渇きを癒すためのものであり、井戸からくみ上げる水以外の何物でもなかったのである。

けれどもイエス様は、彼女にとって本当に必要な「水」をお与えになる方。イエス様は言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(4:13) と。

彼女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」(4:15) と。・・・彼女は、井戸端に、周りの人の目を気にしながら来るのに疲れていたのであろう。イエス様は、そんな彼女の事情を全て知っておられた。彼女が過去五回も結婚と別れを経験し、現在も夫でない男と暮らしている、ということをイエス様は全て知っておられた。彼女は傷を負って生きてきた。その苦しみを、イエス様は全て知っておられ、そしてその彼女にとって、今本当に必要なものをお示しになるのである。

イエス様は言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい」(4:21) と。・・・イエス様を信じること。イエス様を救い主として確信すること。ここに本当の礼拝がある。「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である」(4:23) ―――生ける命の水、・・・それは真の神様を、救い主イエス様を礼拝することによって得ることが出来る。礼拝は、神様の大いなる愛と赦しに触れる時。そして心からの悔い改めを持って、新しく生き直していく場所。サマリアの女性にとって必要だったのは、まさにこのことであった。

今回釈義している中で、この「サマリアの女」の境遇とは、もしかしたら一個人の境遇にとどまらず、北イスラエルの民の境遇、つまり最初に述べたように様々な宗教が混じり合い、まことに礼拝する対象を見失っている（あるときはこっちの神、またあるときはあっちの神といった）人々の信仰生活が投影されているのではないかと考えた。

聖書は民を女性形で言い表すことがあるので、そのような解釈に基づいて、この「サマリアの女性」を一個人の不遇に留まらせず、民の礼拝（ヤハウェ信仰と異教信仰）の問題として読むことができるのではないか、と。またそれは決して「サマリア」の問題だけでなく、「エルサレム」つまりユダヤの民の信仰の有り様に対する問いかけともなっている。「エルサレムでもない所で」（4:21）というのは、エルサレム神殿の栄光に固執し形式主義・信仰の形骸化に陥っていたユダヤの民に対するメッセージにも聞こえる。

そのように考えていくと、「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である」———この一節がまさにこの箇所のクライマックスであることが分かってくる。

『聖書教育』より

「イエスさまがいわれた『霊と真理による礼拝』について語り合いましょう」（大人クラス）———「わたしたちは礼拝する教会を目指します。～神を第一とし、神の栄光をたたえて、日々の歩みに出かけていくためです。」（相模中央教会「五つの目標」より）